



Title	旅の時間論への助走
Author(s)	清水, 賢一郎
Citation	北海道大学観光学高等研究センター共同研究会「観光創造研究会」設立準備会, 「観光創造学を考える」研究会録. 2013年11月23日, 24日. 北海道大学遠友学舎., 82-93
Issue Date	2014-07-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/56565
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	proceedings
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	07_1shimizu.pdf (発表)



[Instructions for use](#)

◆研究発表7

旅の時間論への助走

北海道大学メディア・コミュニケーション研究院
清水賢一郎

取り組んでいる研究領域・プロジェクト

今日は西山先生の宿題に沿ってお話ししたいと思います。まず一番上です。取り組んでいる研究ということですが、恥ずかしながらあまり取り組んでいません。そこには以前取り組んでいたものも含めて書いてあります。初めてお話しさせていただく方もいますので、昔の話から始めています。(1)は博士論文です。もともと中国研究、今でも捨ててはいませんが、特に中国の近代文学を専門にしております。かつてのいわゆるオーソドックスな文学研究というのは作家論と作品論が主流でした。私はどちらでもなく、タイトルにありますように、ノルウェーの劇作家イプセンが、明治時代の日本と中華民国期、清朝終焉後から1945年までの中国で、どう受容されたのかを比較研究しました。特定の作家や作品ではなく、イプセンに関わるものは全部やる、そういうスタンスで、しかも受け手側のことをやりましたので、文学作品が生産されて流通し消費されるという流れでいうと、生産の部分にはあまり目を向けず、流通と消費の部分をやりました。そこで必然的にメディアの研究に向かうことになり、メディア文化論ないしメディア社会史のような研究をやりました。サブタイトルが「恋愛、貨幣、国民国家のドラマ」と三題嚙のようになっていますが、男女関係あるいはジェンダーといいますか、特にイエを中心とする生命の存続継承という問題と、ここでは貨幣としていますけども資本主義システムの問題、贈与経済が資本主義システムに変わっていく過程、それから近代になって中国にも明治日本にも国民国家が出来上がってくるわけですけども、その3つが連動していたという様相を、イプセンという劇作家の特に1870年代に書かれた劇作品を中心にそ

の受容プロセスを跡づけるというのが私の博士論文でした。今日の発表は時間論とタイトルに掲げておりますが、博論の特にこの資本主義システムといいますか、貨幣の問題は時間の問題に深く関係しており、その意味で、いまだにほとんど同じような問題圏の中に相変わらずいるなと自分ながらそう思っています。

それから(2)ですけど、これは観光創造専攻に参画してから、中国研究を専門とする自分が観光と絡めて何ができるかということで、中国旅行社という、1920年代に上海で出来た近代中国最初の旅行会社と、そこが出していた『旅行雑誌』というズバリそのもののタイトルの雑誌がありまして、1927年創刊で、1954年まで出ていた雑誌で、今は後継誌がありますが、そういう雑誌の研究を科研費をとって2年間行いました。(3)は今年からですが、所属しているメディア・コミュニケーション研究院内部の共同研究プロジェクトで、実際には山田先生のご発案だったんですけど、幹事役として私が研究代表になりまして、「拡張現実の時代における<場所>と<他者>に関する領域横断的研究」というテーマで、もう1つの専攻、国際広報メディア専攻の先生方、大学院生にも加わってもらっています。ここでは「拡張現実の時代」という言い方をしていますが、これは今現在ということです。私は歴史研究をずっとやってきましたが、ここでは現在的なコミュニケーション、今進行中のところに踏み込み、場所と他者を切り口に考えようとしています。(4)はまだ始めていないにも等しいのですが、今年の9月から西山先生に引き込まれて、宇治の文化的景観の保護計画プロジェクトにも携わることになりました。萬福寺を中心に黄檗地区に関する文化的景観の価値づけをこれ

から一生懸命にやろうと。もともと文化的景観に興味はありまして、中国文化研究の視点から風水に関心があり、実はこの黄檗山萬福寺、行ったことのある方はご存知だと思いますが、一歩中に入ってみると、日本のお寺じゃないんですね。伽藍から建物まですべて中国風、明代の中国をそのまま持ってきたような空間になっていまして、完全に風水の考え方にのっつてつくられている、面白いお寺なんですけど、ここを宇治の文化的景観の中にきっちり位置づけたいという野心をお持ちです。これは私にとっては初めての実践的デザインに関わる仕事でして、西山先生のマップでいえば私はこれまで上の方のことばかりを、理論研究なんていうと偉そうですけども、やってきたんですが、今回初めて現場といいますか、そちらの方に踏み込みつつあるところですよ。

観光創造学への考えと貢献の可能性

～時間・語り・自己に着目して

続いて2番目に移りたいと思います。観光創造学に対する考え、あるいは自らの貢献の可能性。これは悩み続けていまして、今は旅の時間論をメインにしようと考えています。ただ時間論というのは、物語論とも絡めて考えてようとしていまして、同時に生命論にもつなげていきたい。もともと中国研究が専門ですので、中国の生命観、世界観、自然観、人間観から、今、日本で世界で行われている観光研究を捉え直したいと思っています。これは野望なんですけども、観光研究というのはどうしてもユーロセントリック (Eurocentric) といつか、あるいはアメリカも含めて、欧米中心のところがあるように思えまして、中国で行われている観光研究も、なぜか非常に西洋的といひますか、中国的な観点に立った観光研究というのは私のみる限りではほとんどやられていない。そこを問い直したい。たとえば風水という考え方は、カッコして「社会」と書いたところが実はかなりのポイントではないかと思ひまして、中国では社会という概念が伝統的にはなかったし、今で

も基本的にその点が変わっていないのではないかと中国研究者はそう見ている人が多いのです。日本人がイメージするようなコミュニティとは違うコミュニティのあり方があると。昨日、山村先生が仰っていた貴州省のコミュニティ・ベースド・ツーリズムで、上手くいっているところは、その宗教的な組織、祭りの集まりというのか、そのトップと共産党が上手くオーバーラップしているところが成功しているというお話がありましたけれども、中国では往々にしてそういうことがありますね。つまり、いわゆる社会というものとは違うかたちで宗教が機能している。それを社会だといひばそうかもしれませんが、中国には「社」とか「会」とかいうものはありますが、「社会」というものはちょっとどうなんだろうと、そのあたりも含めて中国的な視点から観光を考えていくと、従来とは違う図柄が出てくるのではないかと考えております。

旅の時間論に戻りますと、観光の議論では従来「場所論」は非常に重視されてきた。たとえば発地とか着地とかいひますし、聖地巡礼にしても場所という問題が論じられます。それはむろんその通りなのですが、ちょっと私はひねくれていまして、場所の問題は非常に重要だとわかっていながら、自分の立ち位置をどう切り開くかというので、やや無理やりなところもありますが、時間ということを考えていひたい。というのも、旅の研究はたくさんありますが、時間の問題を正面から論じたものは極めて少ないようです。そこになんとか食い込みたい。レジュメに手書きで生命と情報と書いておきましたが、たぶん今、私たちの時代で、生命と情報は非常に重要なキーワードといひかテーマだと思ひます。これを掛け合わせたところで今注目を浴びているのは、たとえばゲノム、iPS細胞。まさに生命と情報を取り扱う生命工学とか分子生物学がありますが、そうした研究の一方で、目に見えない部分で生命と情報が掛け合わされると、そこに昨日から話題になったキーワードとして価値といひのが出てくるのではないかと。そこに「語り」

というものが機能することで、生命と情報の間のところに価値というものが生じてくるのではないかと考えております。これを時間論とも関連づけて理論的に展開したい。固有名詞でいうと、ドゥルーズとレヴィナスが時間の問題を論じており、微妙に二人のいうことが噛み合っていない部分もあるんですが、その二人の議論をなんとかつなげられないかと模索しています。日本人の名前を2つ挙げていますが、木村敏は精神医学の領域から時間と自己の深い考察を展開しており重要な論者です。吉田健一は作家で、ほかならぬ『旅の時間』という表題の短編集を出していますが、これが実にいいんです。これで旅の時間をすべて書き尽くしているとは思わないけれども、ある重要なアスペクトは見事に小説に結晶化させていると、何度読んでもぐっとくるいい本です。これをなんとか読み解きながら、旅の時間論を考えてみたいと思っています。前置きに時間を取りすぎましたが、3番に移ります。

空間移動から時間移動への反転と「語り」

こちらは、講義や公開講座ですでに話していることをまとめ直したものです。(1)に浦島太郎の話の挙げています。浦島太郎の話はすごくおかしな話、不思議だなと思うんですが、亀を助けて竜宮城でご褒美をもらって来る、という話に一見みえますが、実は亀を助けたとかご褒美をもらうというのは、後から加えられた要素だと専門の研究で明らかにされています。最も古いバージョンから一貫しているのは、戻ってくるとお爺さん、あるいは死ぬ、つまり一気に時間がぱっと経ってしまう、その話だけが共通のモチーフとして続いているわけです。要するにこれは、恩返しの話とか、宝物を得て英雄として故郷に錦を飾る話ではなく、時間の不思議さを描いたおとぎ話だと思います。そこで空間移動していくわけなのですが、空間移動の話、途中の景色はまったく書かれず、一気に竜宮城に行ってしまうと、帰ってくると時間が反転する。ですけど、皆さんおそらく納得されるん

じゃないかなと思うのですが、旅に出ると時間軸といますか、時間の流れがぐにゃっと曲がりませんか？たぶんそういう経験は皆さん大なり小なりされると思うんですが、そのところをやりたいと思っています。しかもそれを私たちは「語り」を通じて、おそらく旅の時間を、目に見えないものを、見えるかたちにするということをやっているのではないかと。なぜそこで語りになるのかというと、(3)にも関わっていますが、語り、あるいは物語は、2つの世界を分離すること、語るこちら側と語られるあちら側と、視点が二重化することが必然的に起こるでしょうし、それから物語はアリストテレスが言うように始め・中・終わりがあるというふうに、区切るということが起こる。ここで、文化人類学で、たとえばヘネップがいう儀礼の問題とも密接に関わっているのですが、そういう時間的な構造化が必然的に、何かを語ろうとすると生じるということであり、それからもう1つ、物語は一人では成り立たず、必ずや複数性によってなされる。いわゆる独り言をつぶやくような場合であっても、それは自分が聞く。つまりどこかに必ず聞き手がいないと物語は成立しません。必ず他者に投げかけられるものであり、逆にいえば必ず他者からなんらかの応答が返ってくる。昨日、真板先生が価値観のギャップ、それはゲストとホストの間で起きているというお話でしたけども、語り手と聞き手というふうに言い換えることもできると思いますが、価値観のギャップみたいなものがそこに必然的に生じてくる。そのように、物語というものはどうしても聞き手を想定しますから、原理的に他者を指向するということ。ただそこで問題になるのが、そこで想定されている他者はいったい誰なのか、そこで語っている私は誰なのか、ということで(4)に入っていきます。

<あいだ>としての自己の揺らぎと時間の隔時性

おそらく語っている自己、あるいは自分で自分の旅の土産話をする場合には、語っている自己と語られている自己の間に、微細かもしれないです

がズレが生じる。これは木村敏がハイデガーを参照しながらいっていることです。語る自己と語られる自己の間に、葛藤といいますか揺らぎといいますか、距離感というか、時間的なズレが生じる。そこからいろいろなものがズレていく。それは良くも悪くもズレていく。そうしたズレというものが、石森先生も注目していましたが旅におけるエクスタシーの問題につながっていくのだろうと思います。たとえば詩人のランボーは「わたしは一個の他者である」といっていますが、おそらくそういうことが生じてくる。繰り返しになりますが、土産話、旅の物語は、私が私自身の出来事を語るということになる、しかもその出来事は必ず境界線を踏み越えていくときに生じるものだと、いわゆる物語論ではほぼ定説になっていますが、境界を踏み越えて行って、またその境界を踏み越えて帰ってくる。その行って帰ってくるというのが、一番基本になる物語であり、たとえば子どもの遊びで「花いちもんめ」というのがありますけど、あれは行って帰ってくるだけなのに、なぜか子どもたちは嬉々としている。あるいはシーソーも、パタパタやっているだけで何が面白いのか、と思うのは大人で、やっぱりパタパタやるのが人間の根源的な欲求のどこかにあるような気がする。それはいろんな人がいっていますが、今日は資料を読んでいる時間がないのですが、児童文学者の瀬田貞二などがいっています。いずれにせよ、境界を踏み越えるとき、その場に発生する物語はいわば象徴的な<死>と<再生>の道行きだといえる。それがたとえば浦島太郎の話に典型的にあるいはミニマムなかたちで出ているわけです。しかもその土産話というのは、皆さんもそうじゃないかと思いますが、聞いてくれる人によって土産話の中身や語り口が変わるといってもごく普通のことではないでしょうか。あるいは同じ人に話していても、別の機会に話すと変わる。そういうふうに、たえず語り直され、上書きされるような、そういうもので、その度に、自分というものがいい意味でも悪い意味でもズレていくということが起

こるのだろうと。その自己変容は、宗教的な体験でいえば、回心、救済とも重なり合ってくる。宗教はまさにいろいろな決まり事、しきたり、社会的な仕掛けとして自己変容を導き出すようなシステムを整備していて、たとえば伊勢参りやお遍路さん、今年度のCATS公開講座でテーマにしている聖地巡礼も、そういうものとしてあったはずで

最後(6)で、ここまでかなり駆け足でしたが、「同行二人」の話に移ります。「同行二人」というのは、ご存知のようにお遍路さんの笠に書いてある。辞書を引くと、旅というのは自分一人ではなく、お大師さま、弘法大師空海と一緒にあなたと歩いてくれているという意味だと書いてあるし、一般にそう思われていて、それで間違いないのですが、私自身は、一緒に歩いてくれているのは、(4)に書いてあるような、<あいだ>としての自己、<あいだ>としての他者、自己と他者とが重なりつつ、未決定な状態で緩くつなぎとめられているようなそういう自己であり他者、おそらくそれが同行二人の意味なのではないかと思っています。今日はこういう場なので思い切ってこういう話をしましたが、まだ全然考えがまとまっていなくて、きちんと資料や研究の蓄積の上での話ではなく、思いつきに頭出しだけしてしまいましたが、いずれ同行二人論をしっかりとまとめてみたいと構想しています。

最後に、同行二人の問題を、レヴィナスに即して読み替えると、【資料2】ですね。レヴィナスに『時間と他者』という、面白いが難解な本があるのですが、ここではレヴィナス本人が晩年にインタビューを受けて、自著の解説をしているところから引用しました。「『時間と他者』は他者との関係を時間という要素を持つものとして考究したものです。時間そのものが超越であるということ、時間こそがすぐれて他者および他者性一般に向かったの開かれであるという着想が兆したのです。このテーゼでは超越を時間の非連続性[隔時性]として考想したものです。」これはすごく面白い。私

は旅の時間論を、一言でキャッチフレーズ的にいってしまうと、旅の問題を dia-chronie あるいは ana-chronism ともいいますが、時間の感覚が飛んでしまう、時間が逆流してしまうような、むしろ時間というものがそこから生成してくるような、それはドゥルーズもそういうことを書いていますけど、旅の時間がどう生成してくるのかを考えたい。ただ、今日こうやってお話ししてきても、けっきょく何を言っているのかわかってもらにくい、私自身がまだよくわかっていなくて、今日は「助走」と書いていますが、ほとんど準備体操に近いあたりで、こんなことを妄想しはじめているというところです。

【コメント・質疑応答】

コメンテーター1：小林（天）

ありがとうございます。しかし、清水先生のお話のコメントを私に振るかという印象で（笑）。清水先生の講義を15限くらい聞いてからでない、コメントのきっかけもつかめないというのが正直なところです。

ツーリズムの存在に関して3つの要件があると思います。まず動機があり、続いて時間、予算という順番だと思いながらお話を伺いましたが、その程度のことしか思い浮かびませんでした。また、浦島太郎と桃太郎は、ツーリズム研究において並論的に扱うとおもしろいことになるのかなとぼんやり考えていました。

旅の文化論については、昨日に西川先生がおっしゃったハイ・カルチャーにも通じるテーマだろうと思います。しかし、私はずっとツーリズムの現場に身を置いてきた人間で、清水先生のおっしゃるまさにハイ・カルチャー的な旅の文化論は、私には手に余るというところで、申し訳ありませんがコメントを終えたいと思います。

コメンテーター2：花岡

私からは2点、感想があります。まず資料の3

枚目、水をめぐる清水先生の論考の中で、荒川修作の作品が取り上げられている点です¹。岐阜県に荒川修作とマドリン・ギンズの「養老天命反転地」という、彼の世界観を訴えかけるテーマパークのような広大な作品があるのですが、そこに行くと、本当に自分が自分の人生を旅のように追体験するような、旅と人間、清水先生の言葉を借りれば時間論の中の、不死、死なないということ、身体で感じる体験ができます。荒川は直接的ではないにしろ、「旅」というものを表現していて、現代作家達は時としてこうした美術作品も多く創っているのではないかと、清水先生の話聞きながら感じました。そして、私たちとしては、アーティスト達がモチーフとして扱っている「旅」についても、観光創造の分野から、特に清水先生の哲学的な議論の中で解明していくと、現場レベルでも面白いヒントが得られるのではないかと感じました。それが1点目で、これは人間的な視点で私が清水先生と接点を感じたところです。

そしてもう1点目は同じ資料の中に書かれている方丈記についてです。ここで清水先生は自然現象に関するくぐりを引用されていますが、私は元々都市計画や建築が専門なので、この方丈記の中で鴨長明が、まずは四畳半くらいの建物の中から、自分の人生を追体験するとか、人生を旅に見立てて振り返るとか、どちらかという、方丈という建築、物質的な環境の中から、考えることを始めているという点に興味を置いて読ませて頂きました。小屋の中に入って人生をもう一度振り返る旅に出る、という鴨長明の様子から、方丈という建築もまた、人間に旅を考えさせることのできる作品だなと感じたところです。清水先生の論考からはこのような2点、考えさせられました。私自身は方丈記をめぐる人生の旅についての発想と、ギンズと荒川修作のアート作品から発せられる旅との関連性、どちらも観光創造を捉え直すことのできるテーマだと感じました。

回答：清水

お二人の先生、ありがとうございます。限られた時間という以上に、こちらがまとまっていなかった話をそのままぶつけてしまったので、私自身も十分に理解していないことを話しているので、聞いている方には大変であったかと思います。申し訳ありませんでした。

花岡先生からは、非常に嬉しいコメントをありがとうございます。荒川修作については、ここでは三鷹の住宅を例に挙げていますが、天命反転地は自然の中にあり、水という問題と絡めてもなんの違和感もないと思うのですが、「天命反転住宅」と水を絡めるといのは、自分でも不十分なところがあるかなと思いつつ書き、それでも絶対にそうだと、自分では思っていて、これは得意の論とか観点で、天命反転という身体的に体感されるようなものですね、そういうパフォーマンスアートというようなものは、発展して考えていけば旅というものにつながってくると思うんですね。それは観光と音楽ということでもそうですけど、いわゆる観光全般にわたっていえると、昨日の石森先生の言葉でいえば、アートとツーリズムは相同なんだろうと私は思っています。これを強く表明するのが課題でもありますが。

コメント：石森

清水先生ありがとうございます。私にとって、清水先生が観光創造専攻にいてくださるのは非常にありがたいと常日頃から思っています。今日のお話も楽しみにしていました、清水先生の話聞きながら、30数年前の自分を思い出していました。当時、観光研究に踏み込んでまだそれほど経っていませんでしたが、私は「遊び論」という大きな枠組みの中で「観光」をいかに位置づけるか、ということで悩んでいました。私は観光研究にシフトする前は、民族学や文化人類学の研究をしていました。とくに、1978年から80年にかけて、ミクロネシアの絶海の孤島でフンドシ1本になってフィールドワークを行いました。そのときに私は島の人々のコスモロジー（宇宙観）について調べ

ていました。当時すでにキリスト教に集団改宗されてから30年ほどが経っていましたので、人々のコスモロジーのあり方が大きく変化していましたが、私は運よく島の中で最高齢の長老からいろいろなことを教えてもらいながら、コスモロジーの再構成を試みました。

私は梅棹忠夫先生の弟子であり、20歳代半ばの頃から梅棹先生が主宰する共同研究会に参加した経験があります。そのさいに学んだことのひとつが「人間にとって・・・とはなにか？」という本源的な問いかけの重要性です。そのために、私はいまでもつねに「人間にとって観光とはなにか」ということを自問自答し続けています。そして、民族学、文化人類学から観光研究にシフトした当初は観光と宗教の関係性について考えており、その一環で「遊び論」の枠内で観光を考えようとしていました。

ところがやがて「新・観光学運動」の旗手になり、さまざまな世俗的・実学的なことを手掛けているうちに、どうしても「世の為、人の為」に役立ちうる観光研究に力を入れるようになり、ともすれば「人間にとって観光とはなにか」という本源的な問いかけを疎かにしがちでした。

本日、清水先生の発表を聞きながら、あらためて「人間にとって観光とはなにか」という原点に立ち返って物事を考えることの大切さを強く感じた次第です。私は北大で大学院観光創造専攻を開設するためにみんなでいろいろと議論をしている中で、「世の為、人の為」に貢献できる実践的な研究・教育と共に、その一方で「人間にとって観光とはなにか」という本源に立ちかえっての研究・教育の大切さを強く意識しました。いわば、観光創造専攻の原点を清水先生の話をとおして再認識できたわけです。日頃多忙なために、ついつい忘れてしまいがちな観光研究・教育の原点を再認識できるのも、まさに共同研究会の1つの意義ではないかと思います。ありがとうございます。

コメント：真板

今のお話を聞いていて、私の勤務する大学には大沢池があって、これは1200年前の造形物としては唯一京都の中に残っていて、観光の1つの名所になっています。その時に、どうしてそれが残ってきたかと考えると、前に民博の研究会でお話ししたこともあります。あの報告書を読んだ住職に呼ばれてですね、この中に1つ落ちていることがあると。なぜ人は大覚寺に詣でるのかということ、嵯峨天皇がつくったということだけは潰れると。それは、嵯峨天皇というのが一介の人間であり、その時点で終わっていると。しかし権威はそれだけでは伝わらない。伝わる理由は、先生がおっしゃった語りですね。要するに、時間を人びとに認識させる宗教というものが、大覚寺こそが、離宮に大覚寺という寺の宗教性を帯させたことによって継承されてきたと言います。だから、常に、思想というか宗教というものによって、思想と時間を上に乗せて、そこに嵯峨天皇という実体あるものが合わさることで、そこに1つのなんというんですか、時間をかけて人びとが1000年詣でるという仕掛けがあるのではないかとわれ、驚いたことがあります。今、お話を聞いていて、語るということと、先生はさっき、絶えず繰り返すということで時間の問題を克服したというけれど、これは観光に重要ではないかなと思います。余談になりますが、この3ページ目の〈天命反転〉としての旅というところにヘレン・ケラーの話が出てきますけど、waterと指文字で綴ったと書いてありますが、これを読んでいてもしかして思ったんですけど、実はこの大沢池復活の話をですね、大覚寺でこういうことがあったと母に話したときに、母は昭和6年に大覚寺に卒業旅行で行ったんですね。その時に、あなたより私のほうが大覚寺に行っていると、綺麗な蓮が咲いているのを見た。その時に、一緒に行った相模女子大学の前身なんですけど、その時の先生がですね、向こうから歩いてくる人に、うちの母の手を引いて連れて行って、この人と握手しなさいと言ったと。この人は誰ですかというと、ヘレン・ケラーです。ヘ

レン・ケラーがある女性に連れられて、池の天神島に渡る橋のところであちの母に会ったんですけど、その時に、ヘレン・ケラーは池の僅かな池の流れも含めて、京都で水の感覚というのを感じているんですね。waterという水のエピソードから思い返しました。

回答：清水

先生方ありがとうございます。石森先生にそう言われて、非常に恐縮しておりますけども。ただ、文学研究をやっているときから、人間にとって文学とは何か、表現とは何か、とそんなことばかり考えてきまして、人類史の中でというようなことばかり考えていると、観光創造に来て、相変わらずそういうかたちで人を考えてしまうというか、そういうことを考えないとやっていけないというところがあるんですね。

それから真板先生、大覚寺のことは、すみません、私はそのエピソードそのものはあれですけど、仰っていることは非常に重要だと思います。宗教、それは宗教というかたちでなくてもいいんですが、思想といえますか、人間が思索したことが、語られて、しかもその時に、良くも悪くも実体的な形というか、そういうものになり、ある種手触りをもった、もしくは温度をもったかたちになって伝わり、そしてまた語り直されて、話がつながっていくというのが、旅にとっても重要なのだと改めて感じました。

¹ 清水賢一郎「水という旅——生命のみなもとを遡って」(『まほら』68号〈特集＝アクアリズム〉、旅の文化研究所、2011)を当日資料として配布した。